

薄荷 MENTHAE HERBA

(基原) 1) 2) 5) 9) 14) 15) 16) 17) 24) 29)

ハッカ *Mentha arvensis* Linne var. *piperascens* Malinvaud (*Labiatae*) の地上部を乾燥したものである。

< 来 歴 > 1) 2) 14) 27)

ヨーロッパでのセイヨウハッカ (*Mentha piperita* L.) の利用が東漸して中国 (『新修本草』 (659) に初めて収録) に伝わり、用いたしたものと思われる。日本にも古く渡来し、『大和本草』 (1708) に栽植の記録が見られるから 18 世紀初頭には栽培が行われていた。

—学名の由来—¹⁶⁾

Mentha: ギリシャ神話の女神 Menthe にちなむ。Theophrastus が付けたもので、地獄の女王 Proserpine に、ハッカに変えられたという。

Arvensis: 「原野生の」「耕地生の」 Piperascens: 「コショウのような」

ハッカ薄荷 - 李時珍 ころろろ

— 名 称 —

李時珍

薄荷とは俗称であって、陳士郎の『食性本草』には「菝葜」と書き、楊雄の『甘泉賦』には「芡蓐」と書き、呂忱の『字林』には「芡苦」と書いてあるから、薄荷が訛称なることが判る。孫思邈の『千金方』に「蕃荷」と書いてあるもまた地方音の訛である。陳士郎は「胡菝葜」と区別するために「吳菝葜」といったのだといっている。^{2) 20)}

(原植物) 1) 15)

東亜温帯一般に分布、本邦各地に自生し、栽培される多年生草本、地下茎は長く伸びて繁殖する。茎は直立し高さ 20~80cm、しばしば疎に分枝し方形で細毛を付ける。全株に強い芳香がある。葉は対生、長楕円形~狭卵形~卵形で長さ 2~5cm、葉先は尖り、鋸歯縁、両面に腺毛と毛がある。葉柄は長さ 3~10mm である。茎上部の葉腋は短い花梗をだし、淡紫色~微紅色~白色の小形の唇形花が多数集まり球状に付く、分果は楕円形でやや扁平、長さ 0.7mm である。花期は 8~10 月。

ハッカ類は交雑しやすく、変種が多いので系統的な分類は困難である。特に著しい変異は毛の状態にみられる。栽培品種としては寒冷地向や暖地向など種々ある。



(類似植物) 1) 2) 7) 19)

セイヨウハッカ (Peppermint) の原植物 *Mentha piperita* Linne は欧米で栽培されている多年生草本。その精油 (ペパーミント油) は menthol 含量 50~60% で日本種よりは少ないが、香気はるかにすぐれている。薬用及び香辛料として使用される。また、ミドリハッカ (Spearmint) の原植物は *M. spicata* (*M. viridis*) 又は *M. cardiaca* である。*Mentha spicata* Linne は米国で栽培されている。その精油 (スペアミント油) は主成分として l-carvone 60%内外を含有し、menthol は含まれていない。香気は他のハッカ油と全く異なっている。米国ではお菓子の香料や歯磨き、あるいは薬用として応用されている。

(性状) 1) 24)

茎及びそれに対生する葉からなり、茎は方柱形で淡褐色~赤紫色を呈し、細毛がある。水に浸してしわを延ばすと、葉は卵円形~長楕円形で、両端はとがり、長さ 2~8 cm、幅 1~2.5 cm、辺縁に不揃いの鋸歯があり、上面は淡褐黄色~淡緑黄色、下面は淡緑色~淡緑黄色を呈する。葉柄は長さ 0.3~1 cm である。ルーベ視するとき、毛、腺毛及び腺鱗を認める。

特異な芳香があり、口に含むと清涼感がある。

(生産) 1)

栽培には肥えた砂壤土ないし植壤土に、10~11月または4~5月に種根(地下茎)を植え付ける。酸性土壌に対しては極めて弱い。収穫は北海道では精油含量の最も高くなる開花期前すなわち着蕾期前後の9月上旬に、暖地では6月下旬、8月中旬、10月中下旬の3回に分けて行う。刈りとった茎葉は直径10cm程度の束にして風通しのよいところで陰干しして乾燥する。太い茎をできるだけ除き、葉は緑色で香気の強い新鮮なものが良品である。

なおハッカ油をとるためにはこれを水蒸気蒸留して取卸油として採取する。

(産地) 1) 2) 14) 24)

日本では北海道を主とし、岡山、広島県その他、中国では江蘇、浙江などの各省で産する。中国では江蘇、浙江産が品質最高で、それ故「蘇薄荷」と称する。市場では中国産が増加し約100トンの輸入量で、国産は約5トンの生産である。なお、中国産の原植物は *Mentha haplocaryx* Briq. (*M. arvensis* var. *piperascens*) で局方と同じものである。

(品質)

【確認試験】 menthol などのテルペン類による呈色反応¹⁾

【乾燥減量】 15.0%以下 (6時間) ¹⁾

【灰分】 11.0%以下¹⁾

【酸不溶性灰分】 2.5%以下¹⁾

【精油含量】 本品粉末 50.0 g 中、0.4 ml 以上である。(葉に多く茎に少ない) ¹⁾

【選品】

なるべく新しいもの、香気の強いものがよい。¹⁸⁾

新鮮で香味が強く、太い茎をできるだけ含まないもの。²⁴⁾

葉の青々とした香気をつよい丈のよく揃った束がよろしい。²⁶⁾

－栽培・品質－

蘇頌

薄荷は諸處にある。茎、葉は荏に似て尖って長く、冬を経ても根が枯死しない。夏、秋に茎、葉を採って曝乾する。古方に用いることが稀で、或いは薤とともに藿（つけ物）にして食ったものだが、近世では風熱を治する要薬となっているところから、民家で多く栽培する。²⁾

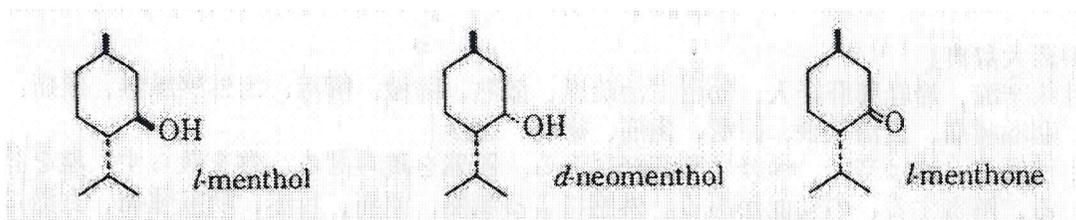
李時珍

薄荷は一般に多く栽培する。二月に旧根から生える苗を清明節の前後に分ける。茎は四角で赤く、その葉は相対して生え、生えた当時の形は長くて頭が円いが、長ずるに及んで尖るのである。呉、越、川、湖の地方では多くこれを茶の代わりにする。蘇州で栽培するものは茎が小さくて気が芳しい。江西のものは稍粗くて、川蜀のものは更に粗い。薬に入れるのは蘇州のものが勝れている。^{2) 20)}

(成分)^{2) 5)}

遊離

精油1%。主成分はl-menthol (70~90%)で大部分~~有利~~の状態、一部mentholの酢酸、吉草酸などのエステルとして含有される。その他l-menthone、iso-menthone、d-neomenthol、 α -pinene、camphene、menthonone、l-limoneneなど。また苦味成分としてpiperitone、piperitenone、pulegoneなどを含む。



(現代薬理)^{2) 5) 7) 9) 14) 16)}

- 鎮痙・運動抑制作用：精油成分は、ハツカネズミ摘出小腸に対して、鎮痙的、運動抑制的に作用し、モルモット Oddi 括約筋に対しても鎮痙作用を認めた。また、menthol、menthone は、ウサギ腸管運動を抑制した。
- 末梢血管拡張作用：精油成分は、カエル後肢及びウサギ耳殻血管に対し血管拡張作用を示した。
- 利胆作用：l-menthol やアセトン抽出乾燥エキス等には Wistar 系雄性ラットに対して胆汁量の増加かつ持続的な利胆作用がみられた。

- 抗アレルギー作用：水エキス及びメタノールエキスは、ラット腹腔内マスト細胞の compound 48/80 による脱顆粒に対して抑制作用を示した。
- 鎮痛作用：メタノールエキスは、経口投与にて、マウスを用いた酢酸 writhing 法で、鎮痛活性を示した。

(古典的薬効)

一 薬 能 一

『神農本草経』『名医別録』に記載がない。→

『傷寒論』『金匱要略』では用いない。¹⁵⁾

『新修本草』(659:唐代)に初めて記載されている。

「味辛苦温、無毒。賊風、傷寒で汗を発す。悪気、心腹の脹満、霍乱、宿食の消えぬものを主る。気を下す。煮汁を服す、亦生食に堪える。人家に之を種いて汁を飲む、汗を發し、大いに勞乏を解す。」^{1) 2) 7) 14) 32) 33)}

『本草綱目』^{15) 20) 32)}

「入手太陰足厥陰。辛能發散。涼能清利。專於消風散熱。故頭痛頭風眼目咽喉口齒諸病、小兒驚熱、及瘰癧瘡疥為要藥。」

訳：手の太陰、足の厥陰に入る。辛は發きだして散らし、涼は清め利す効能がある。もっぱら風を消し熱を散らす。よって、頭痛、頭風、眼目、咽喉、口齒の諸病、小児の驚熱、および瘰癧、瘡疥などの要薬である。

五の毒の汗を發すの利しむる也

『本草備要』^{11) 32)}

「辛能散涼能清、升浮能發汗、搜肝氣而抑肺盛、消散風熱。清利頭目、治頭痛頭風中風失音、痰嗽舌胎、眼目咽喉口齒諸病、皮膚癩疹瘰癧瘡疥小兒驚熱骨蒸、破血止痢、虛人不宣多服、蘇產氣芳者良。」

『中藥大辭典』^{15) 32)}

「性味辛涼、歸經肺肝經入、効用主治疏風、散熱、辟穢、解毒、治外感風熱、頭痛、目赤、咽喉腫痛、食滯氣脹、口瘡、齒痛、瘡疥、癩疹」

訳：性は涼、味は辛で、歸經は肺肝經に入る。風邪を疏らせる、熱を散らす、穢を辟ける、解毒する、の効能がある。外感による風熱、頭痛、目赤、咽喉腫痛、食滯による氣脹(腹部鼓脹)、口瘡、齒痛、瘡疥、癩疹を治す。

『一本堂藥選』^{5) 7)}

「療傷風寒輕証、清口氣、洗漆瘡。」

訳：軽い感染症に疾病、寒による疾病を治す。口中を爽快にし、うるしかぶれに外用として洗滌する。

< 中 医 学 > ^{5) 7) 9) 17) 19)}

疏散風熱 清利咽喉(清頭目・利咽喉) 透疹(止痒) 疏肝解鬱 闢穢

(臨床応用) 19)

感冒症状、咽痛、頭痛などに用いる。

- 解感熱病(風熱)の初期で咽痛や頭痛、咳嗽などの症状には金銀花・連翹などと配合する(銀翹散)
- 風熱の初期で咳嗽が強いつきには桑葉・菊花・杏仁などと配合する(桑菊飲)
- 頭痛の強いつきには白芷・川芎などと配合する(川芎茶調散)
- 扁桃炎や中耳炎などを繰り返す解毒証の体質改善薬として一貫堂では(柴胡清肝湯)や(荊芥連翹湯)を用いる。
- 咽が痛くて声が嘎れるときには訶子・桔梗などと配合する(響声破笛丸)
- 顔面の痤瘡や湿疹には防風・黄芩などと配合する(清上防風湯)
- 肝に入って肝気の鬱滞を除き、自律神経失調症を改善する作用がある。例えば、更年期障害などには柴胡や芍薬などを配合する。(加味逍遙散)

<使用上の注意> 9)

肺虚の咳嗽・陰虚の発熱には使用すべきではない。乳汁分泌低下の副作用があるので、一般に授乳中の婦人には用いてはならない。

< 関連処方 > 1) 5) 14) 21) 29)

- 『和剂局方』 : 加味逍遙散 逍遙散 川芎茶調散 凉膈散
- 『万病回春』 : 加減凉膈散 響声破笛丸 荊防敗毒散 荊芥連翹湯 洗肝明目湯
清上防風湯 滋陰至宝湯
- 『宣明論』 : 防風通聖散
- 『温病条弁』 : 銀翹散
- 『一貫堂医学』 : 荊芥連翹湯 柴胡清肝散 竜胆瀉肝湯

(その他)

ハッカの地上部を水蒸気蒸留すると精油が得られ、これを冷却すれば結晶の l-menthol (薄荷脳) が析出する。この l-menthol を除いたものがハッカ油であり、薬局方にも記載されている。葉は収油率が最も高く、茎には少ないが、葉だけでは水蒸気の流通が悪いため、実際には地上部を刈り取って陰干し、葉付きの茎を用いる。Menthol は皮膚につけると冷却作用、麻酔作用を示し、局所の血流を増加させるため、筋肉痛などの外用薬として湿布や軟膏の原料、マッサージオイルなどに利用されている。そのほかハッカ油も香料や清涼剤として歯磨き粉、ガムの香料など食品や化粧品に用いられる。
1) 7) 19)

メントールには、ハッカ葉 (*Mentha arvensis* Linne var. *piperascens* など) から得られるハッカ取卸油より得る天然メントールと合成メントールとがある。l-メントールは天然に広く存在し、そう快な清涼身があり、d 体に比べにおいては約 3.5 倍、皮膚に対する清涼感は 10 倍以上強く、持続力がある。¹⁾

(参考文献)

- 1) 日本薬局方 第十三改正、第1 追補
- 2) 原色和漢薬図鑑 (上)
- 5) 生薬ハンドブック
- 7) 漢方製剤の知識
- 9) 漢薬の臨床応用
- 1 1) 本草備要
- 1 4) 和漢薬物学
- 1 5) 中薬大辞典
- 1 6) 日本薬草全書
- 1 7) 中医臨床のための中薬学
- 1 8) 和漢薬の世界
- 1 9) 漢方のくすりの事典-生薬・ハーブ・民間薬-
- 2 0) 本草綱目
- 2 1) 原典に拠る重要漢薬 平成薬証論
- 2 2) 原色牧野和漢薬草大圖鑑
- 2 4) 新常用和漢集
- 2 6) 和漢薬の良否鑑別法及調整方
- 2 7) 薬草カラー図鑑①
- 2 9) 漢方修治の実際
- 3 2) THE KAMPO vol.2 No.3 (1984.5) ツムラ
- 3 3) 新修本草